

## 最優秀賞（国土交通大臣賞）

△作文（小学生）の部▽

### 『奄美豪雨災害から学んだこと』

鹿児島県奄美市立朝日小学校 六年 義岡 詩苑

「台風は行っちゃったのに、雨が降るねえ。」いつもと変わらないような雨。これが、あの「豪雨」の始まりだった。

午前中だというのに外は暗くなり、雨の降り方が激しくなってきた。友達が「大丈夫かい。もう、これ帰らんばいかん。」

と言っていた。外を見ると、中庭から校庭へ水がどんどん流れていた。この日はいつもどおり授業を済ませ、

「雨が強いから気をつけて帰るんだぞ。」

という先生の話聞いて下校した。

家に帰り着き、早速テレビをつけると、普通に番組をしている。時折、「奄美に大雨、洪水警報」とは出ていた。本当の豪雨の姿を知ったのは、この日の夜だった。

夜、げん関のベルが鳴った。

「こんな日にだれかい。」

と父が言った。げん関を開けてみると、

「何があつたんかい。」と思うほどびしょぬれでおじが立っていた。おじはあわてた様子で、

「住用は通行止めど。どろ水で屋根までつかつてるし、山がくずれとつたど。」

と言った。おじは、奄美市内に買い物に来ていて瀬戸内に帰ろうとしたら、住用の手前で止められ、引き返してきたそうだ。わたしは「まさか。」と思ったけれど、住用はよく雨が降るのだ。トンネルをぬけて住用に入ると雨ということがよくある。山に囲まれていて雨が降りやすいと聞いていた。

でも、おじの様子から普通でないと感じたので、何か情報を入れようと、奄美大島のラジオ「あまみエフエム デイ！ウェイブ」をつけた。ラジオからは通行止めの情報や土砂くずれの情報が次々と入ってきた。すごい被害が出ているなと思った。この放送は豪雨の時、二十四時間、一日も休まず放送し続けていた。テレビのニュースでは伝えられない細かい情報までくわしく放送してくれた。地元のラジオ局だからできたことだと思う。この日、おじは家に帰れなかったため、わたしの家に一泊しなければならなくなった。

次の日、学校に行ってみると、校庭は水と流れてきた土砂でうまっていた。中庭の池にいたはずのこいが校庭で泳いでいる。とても歩けそうにない。校庭の様子をだれもがぼう然と見ていた。話すことさえしていないかった。先生方の、

「こつちを通って、教室に行きなさい。」

という声にはっとして教室に向かった。教室にはみんなの元気な顔がそろっていた。みんな家の様子を話していたが、

「こつちがこのようなことになっているのに、住用の人たちは大丈夫かい。」

と友達と言った。昨日のおじの様子から、住用はどうなっているのだろうとわたしも心配になった。

実際に住用の様子を見たのは、豪雨災害から一か月ほど後だった。トンネルの明かりは消え、トンネルの中はまだ土砂が入っていた。

あれから十か月。今でも土砂くずれで片側通行の所がたくさんある。しかし、この豪雨災害を通して学んだことがある。

一つ目は、地域で情報を共有し協力するということだ。「あまみエフエム」のラジオ局のおかげで家族や親せきの無事を確認できたり、道路の様子を確認することができた。二十四時間、情報を入れてくれたおかげで、安心できた。おじも次の日、情報を聞いて無事に瀬戸内の家まで帰ることができた。

二つ目は、身近でもこんな災害が起こるということ。だから、日ごろからどう動けばいいかを考えて

おくことが大切だということを学んだ。

この美しい島、奄美大島の復興には少し時間がかかると思う。でも、災害に負けないような心を奄美の人は持っている。これからも協力し合って生活していきたいと思う。